



東京大学大学院  
薬学系研究科・薬学部

薬史学文庫の設置とその意義  
～日本薬史学会創立  
70周年を記念して～

東京大学薬学図書館展示  
二〇二五年一月二十四日(金)～三月二十五日(火)

*70<sup>th</sup> anniversary of the pharmaceutical  
History of Japan*



## 開催挨拶

東京大学薬学図書館は、1958年に薬学部が独立した学部となった時以来、学内外の薬学研究に携わる方々の教育と研究を支援するため、数多くの資料を収集してまいりました。また、日本薬史学会からのご寄贈をもとに設置された薬史学文庫には、日本の薬学研究史上、貴重な資料を多く所蔵しています。これらの資料を後世に伝え、薬学研究並びに薬史学研究のさらなる発展を願って、薬学図書館では資料展示を行っています。今回の展示はその第6回目となります。今後も様々な展示を実施していきたいと考えておりますので、皆様のご助力を賜りますよう、お願い申し上げます。

2025年1月

薬学部図書委員長 大和田 智彦

## 展示概要

今を去ること70年前の昭和29(1954)年10月、日本薬史学会が創設され、朝比奈泰彦が初代会長に就任しました。昭和61(1986)年、野上寿が日本薬史学会第3代会長に就任し、昭和63(1988)年10月、明治薬科大学世田谷校に薬史学文庫を開設しました。

平成3(1991)年4月、柴田承二が日本薬史学会第4代会長に就任しました。明治薬科大学が東京都世田谷区から清瀬市に移転することに伴い、薬史学文庫は東京大学薬学図書館に設置されることになり、平成11(1999)年4月、日本薬史学会から東京大学薬学部に寄贈されました。

そこで、本展示では日本薬史学会創立70周年を記念して日本薬史学会創立・発展に多大の尽力を果たした方々の著作を紹介し、薬史学文庫の設置とその意義について明らかにいたします。

今回の展示図書は学術的価値が高く、歴史的価値を有する稀覯本ですが、劣化損傷が激しい状態であったため、公益財団法人田嶋記念大学図書館振興財団の助成を受け、株式会社資料保存器材の精巧な技術で修復が施されました。これによって、貴重な学術資産の公開と後世への継承が果たされました。

1. 『日本薬学史』 清水藤太郎 南山堂 昭和24年



清水藤太郎は宮城県尋常中学校中退後、明治35(1902)年6月仙台医学専門学校薬学科教授佐野喜代作(後に義職と改名)の助手に奉職した。佐野との出会いは人生の転機になり、薬学への道が開かれた。県立宮城病院調剤員、神奈川県庁衛生技手を経て横浜・馬車道の「上記平安湯本舗・紀伊国屋薬店」の三代目となった。

薬局経営の傍ら、横浜植物会に入会し、牧野富太郎、朝比奈泰彦の知遇を得た。帝国女子医学専門学校薬学科教授に招聘され、『薬局方概論』『漢方薬物学』『薬局経営及商品学』など旺盛な執筆活動を展開した。

昭和24(1949)年『日本薬学史』を刊行した。本書は飛鳥・奈良時代から明治期半ば至る薬物に関する諸現象を抽出し、その生産、取引、消費の経路を詳細に叙述した不朽の名著である。昭和26(1951)年同書により東京大学から薬学博士の学位が授与された。

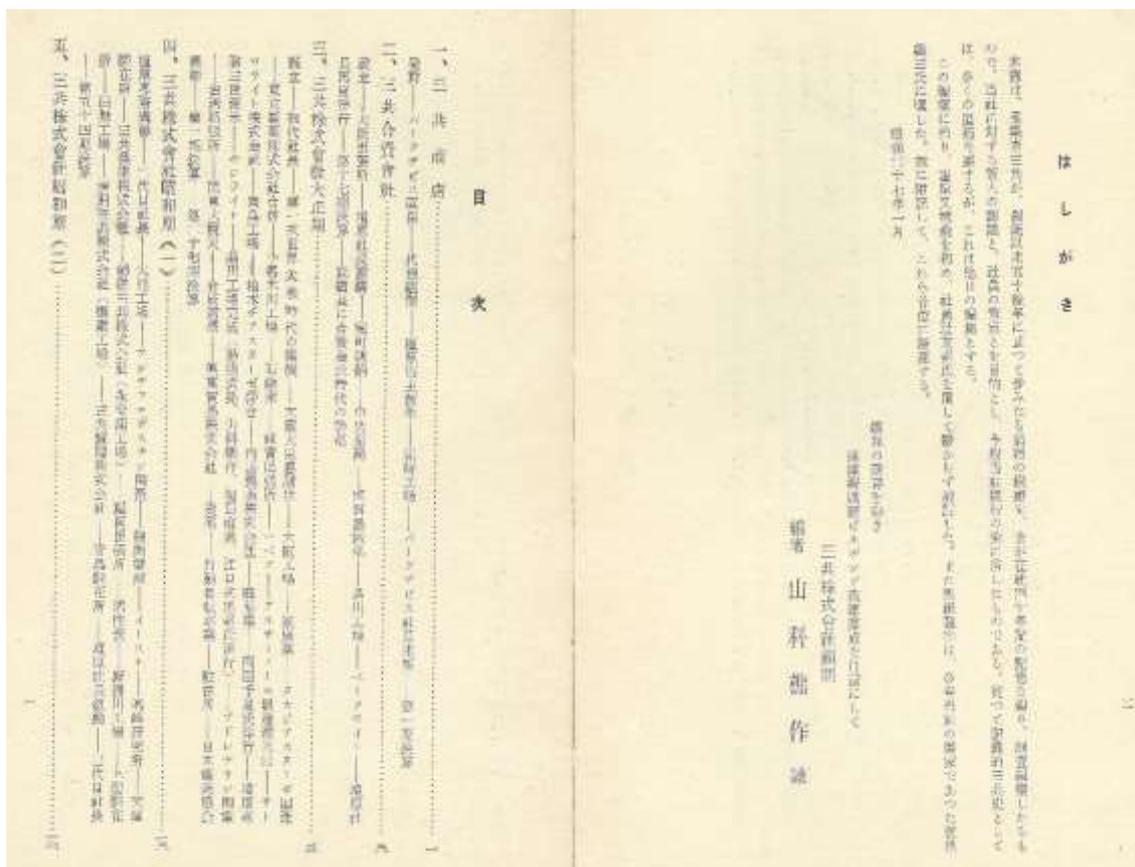
朝比奈泰彦は本書の序文で以下のとおり満腔の賛辞を呈した。

「史として従来有り勝な政府並に支配階級のみを中心とする記録の年代的羅列を超越し、経済的生業としての薬業の発展に論及して居ることは後進を裨益すること多大である。」

本書の献辞は恩師への真情溢れる敬愛の念を余すことなく伝えている。

つつしんで この書を恩師故佐野義職先生の霊にささげます 門人 清水藤太郎

2. 『三共五十余年の概貌：明治32年-昭和26年』 山科樵作 三共 昭和27年



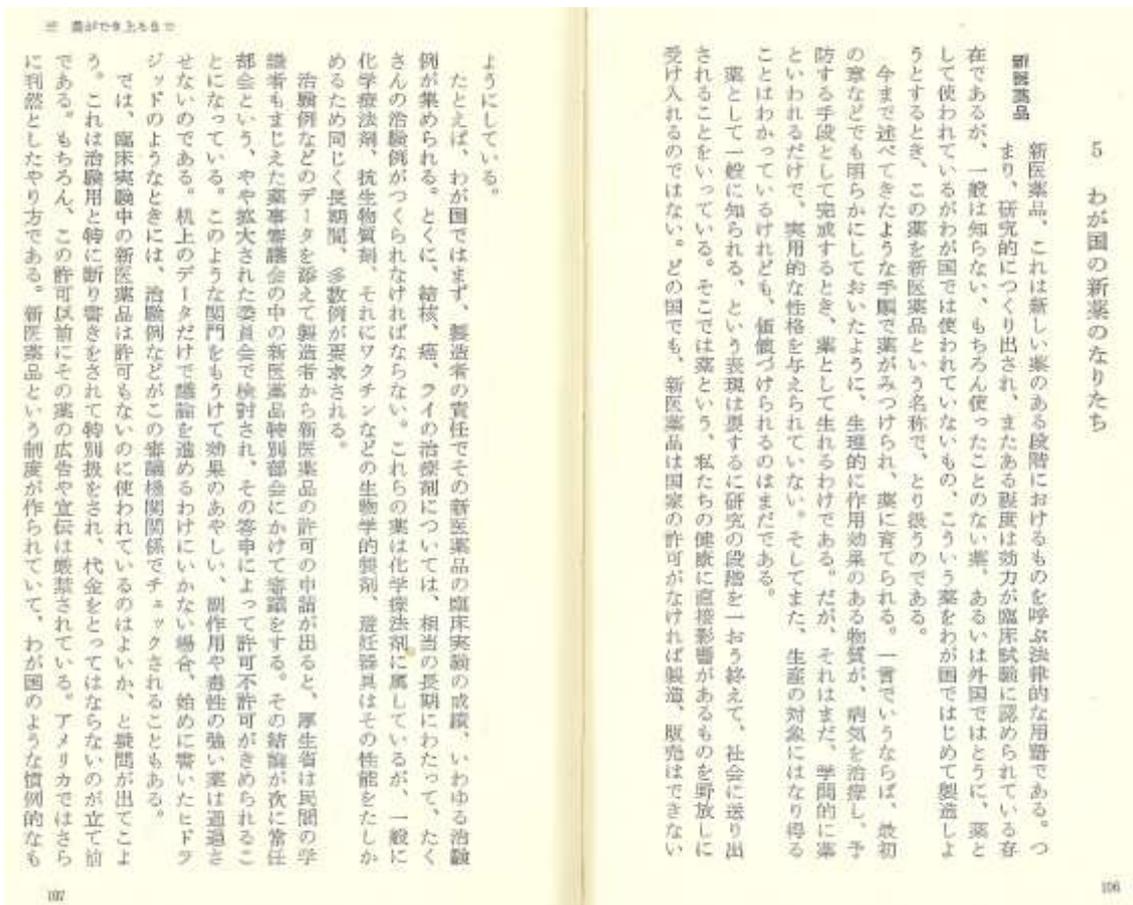
山科樵作は明治40（1907）年9月、東京帝国大学医科大学薬学科に入学し、下山順一郎の指導を受け、卒業時には優等生として恩賜の銀時計を賜った。1年志願兵として陸軍に入隊し、私立九州薬学専門学校教授を経て、大正元（1912）年9月三共合資会社に技師として入社した。

営業部長、支配人、常務取締役、高峰研究所所長を歴任した。昭和24（1949）年5月第一線を勇退したが、引き続き顧問として勤務し、随筆集『三共茶ばなし』を刊行し、『三共六十年史』の編纂委員長となり、「三共の生き字引」と尊称された。昭和29（1954）年10月の日本薬史学会創立に際しては朝比奈泰彦、清水藤太郎と共にその中心となり、「本会の生みの親、育ての親」と評され、潤達清廉、宏量な人柄の山科は後進を懇切丁寧な指導し、博覧強記、風格ある達意の文で数々の著作を刊行した。

本書の目的について山科は以下のとおり述べている。

「薬業者三共が、創業以来五十余年に亘って歩みたる道程の概要を、余が在社四十年間の記憶を辿り、調査編集したるもので、当社に対する新人の認識と、社員の備忘とを目的とし、今般当社刊行の榮に浴したものである。」

### 3. 『薬』 宮木高明 岩波書店 昭和32年



「粋な薬学博士」と評された宮木高明は東京帝国大学医学部薬学科に入学してから間もなく「薬」について「もの」の面しか教えず、「病をいやすはたらき」について語らないので、失望を深め、懊悩した。そして、近藤平三郎教授に教えを乞うたところ、「まず有機化学を学び、そのうちに志向するところを拓け」と説かれたと後に述懐している。

薬化学教室の近藤教授の退官に伴い、昭和13(1938)年3月落合英二助教授が教授、津田恭介助手が助教授になり、宮木も助手に昇任した。昭和17(1942)年千葉医科大学附属薬学専門部教授に着任し、昭和24(1949)年千葉大学薬学部が発足し、初代学部長に就任した。

宮木は『薬学』(昭和25年)、『薬』(昭和32年)、『家庭の薬』(昭和35年)、『薬の正しい使い方』(昭和37年)など多くの啓蒙書を刊行した。本書は薬の生い立ち、発展、製造、流通、影響について平易で分かりやすく論述している。

宮木は昭和49(1974)年1月9日、持病悪化のために教授在職中、62歳で逝去した。その文章力には定評があり、話し言葉が明解な文章になると評されるほどであった。葬儀で千葉県知事友納武人は本書の分かりやすさ、読みやすさに深い感銘を受け、千葉県下の小学校、中学校に配付したと弔辞で述べた。

4. 『東京大学薬学初代教授柴田承桂先生傳』 根本曾代子 [昭和 34 年]



根本曾代子は明治 39 (1906) 年、東京に生まれた。昭和 5 (1930) 年東京女子薬学専門学校を卒業し、昭和 17 (1942) 年から昭和 19 (1944) 年まで家庭科学研究所所長を務めた。

根本は旺盛な執筆活動を展開し、近代日本薬学を築いた先覚者たちの評伝を多数刊行した。柴田承桂、長井長義、下山順一郎、丹波敬三、丹羽藤吉郎、朝比奈泰彦、近藤平三郎、慶松勝左衛門、落合英二の評伝はいずれも根本の筆によるもので近代日本薬学史を研究する上で欠かすことのできない名著である。

晩年のある日、熱海在住の根本はいつもの和服姿で東京都文京区本郷の東京大学薬学図書館を訪れ、かつて『日薬新聞』に連載した「草藥太平記」の「柴田承桂先生の巻」「長井長義先生の巻」「下山順一郎先生の巻」「丹波敬三先生の巻」と「剂界風雲録：丹羽藤吉郎先生」の新聞切り抜きを寄贈した。その詩情溢れる筆致と静謐な墨絵の挿画は画文一致の名品である。

柴田承桂は明治草創期に薬学教育の基礎を築き、薬事制度の創設に尽力し、多くの著書、編著、訳書を著わした。本書は近代日本薬学の柱石として不朽の足跡を残した柴田の生涯を明治の文明開化を背景に叙情豊かに描いている。

5. 『新しい薬局経営』 清水藤太郎・清水不二夫 南山堂 昭和37年

24 薬局 設計

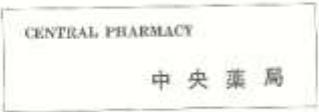
み薬局のほら、ネオン看板、ラジウム管などがある。これに電灯を入れて照明をとりおぼろにする。また、日と行、天行、夜、バック、四種の商品デザインなどのやり方によって、前は、セーターと前後部と様々な得意な多毛、好意をもたせる。これは、スタイム、色彩等よく調和して、よいアツクい気を行なうべきではない。

薬局はオタク、入道行などが蓄積経験がある。水筒ならび材料に命をかけるはずにフッカー仕上げなどがよい。熱は思も向も不可得、なるべく明るい色調とし、箱色を換する場合は、せいぜいサエニートでせうにすべきである。

標識に書く文字は、常用前字かカナを用い、おかしなことを禁じ、この大衆的な親民表示には然符である。前掲の如きは「薬」よりも「オタク」がよい。これを「オタクマ」にするべきである。

薬局の名称は (1)前部の部 (2)地名 (3)状態 (4)オタク寄、などがある。(1)は個人の使用を禁じて (2)は乱雑しやすく誤しみを与え (3)は通用で、(4)はアツキ、セーター、ズリなど覚えやすい。この定説は読者別電報を参考するといふ。

英語では、オタクを DRUGS、薬局を PHARMACY、処方箋を PRESCRIPTIONS と書く。Pharmacy はオタクマから来たラテン語に由来するもので、オタクに製し、界に適用する。ただし、ヨーロッパではドイツ語の Apotheke の方がよく通る。アメリカで「ドラッグストア」Drug Store は、本業薬局の世であり、今にダブート化した薬局チェーン（オタクマ）の発明をいう。アメリカで専業の薬局を Professional Pharmacy という。従って前掲の表示としては PHARMACY が好む。英語の Apotheke というのはドイツ語の薬局 Apotheke と同類であるが、英訳に入ってくるも誤解のこととなり、今ははたふとなくなくなっている。漢字に英語で Pharmacie、イギリスでは Chemist、アメリカでは Drugist がよく用いられている。薬局の標識は、英語を上に、日本語を右下に大書する一法である。



3. 入口 窓の上部を一律にガラスにする場合は、窓の3.5倍(4.8m)まで

薬局 設計

は入口は1.5倍でよい。窓の幅は4.8mあれば入口を2.5倍にしてもよい。入口は1.5倍の方が配列にも利がたつて便利である。床の多い店ではもとより、窓にすれば便があるが、設置は必ず2人以上を要する。薬局は別業の店がよいので、役員が5人いる店でも、食卓とか椅子のとかで1人になることがしばしばあるから、入口は1.5倍の方がオタクがよい。入口を2.5倍にする点配列とか椅子付けを肉体的に考える必要がある。その配列方法が違っていると、一方は数を要したり、数らばっていて前を誤っている不都合がある。薬局を監査全く開放している店では、入口の中央にオタクマを置いて、その左右から窓が入りまわることができるようにする。



4. 薬局 不二

薬局の構造の問題となるのは、入口を右の方にもつければよいことである。原則として入口は一方だけにして、後の方のつめて合符の扉をガラスとし、または角を入口にしてもよい。後丁にも入りかかるとオタクの店に商品デザインがいろいろおぼろしく、多くはアツキなどをちらちらして無用の長物になりやすい。ことに入口が両方になると、入った者が一方の入口から後を見られて、前部としてはおぼろしくないことになる。

入口の幅は、戸の1.5倍を必要とする。後部に入道同定オタクを入れば、戸

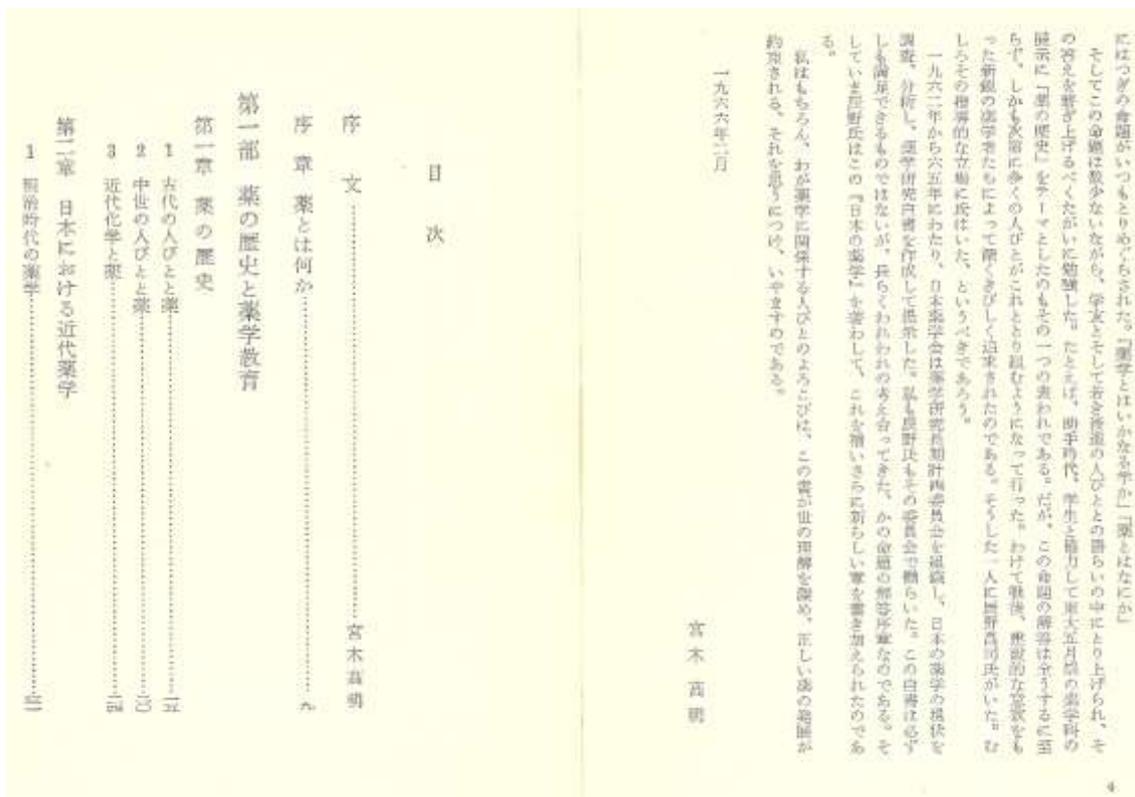
自らを「生涯一薬剤師」と評した清水藤太郎は薬剤師のあるべき姿を追及し、その資質向上を説いた。薬剤師のために創刊した雑誌『薬局』の「平安堂閑話」で清水は薬剤師の意義について以下のとおり述べている。

「薬剤師は一市民として、また、一文化人として民衆の公僕、薬についての良き相談相手であることを心すべきである。薬局はただ単に物品を販売するところではなく、民衆がいつ罹るかもしれない病気やそれに使う薬のことを日頃から学問として研究するところである。」

清水は時代と共に薬局・薬剤師の姿は変化していくことを見据え、平安堂薬局4代目の長男不二夫と共著で本書を刊行した。本書の目的は以下のとおりである。

「本書は独立薬局経営に要する方法、政策、実務を分析し、販売計画を論述したもので、その条件を詳説したものである。薬局経営の様相は近来急激に変化し、取扱品はもとより、買物客の性格も急変しているから、昨日の薬局経営法は、もはや今日の方法でない。大ざっぱなメノコ算やカンだけでは成功しないものになった。常に世態の変りに注意し、施設を合理化して変化に順応しなければならない。」

6. 『日本の薬学』 辰野高司 紀伊国屋書店 昭和 41 年



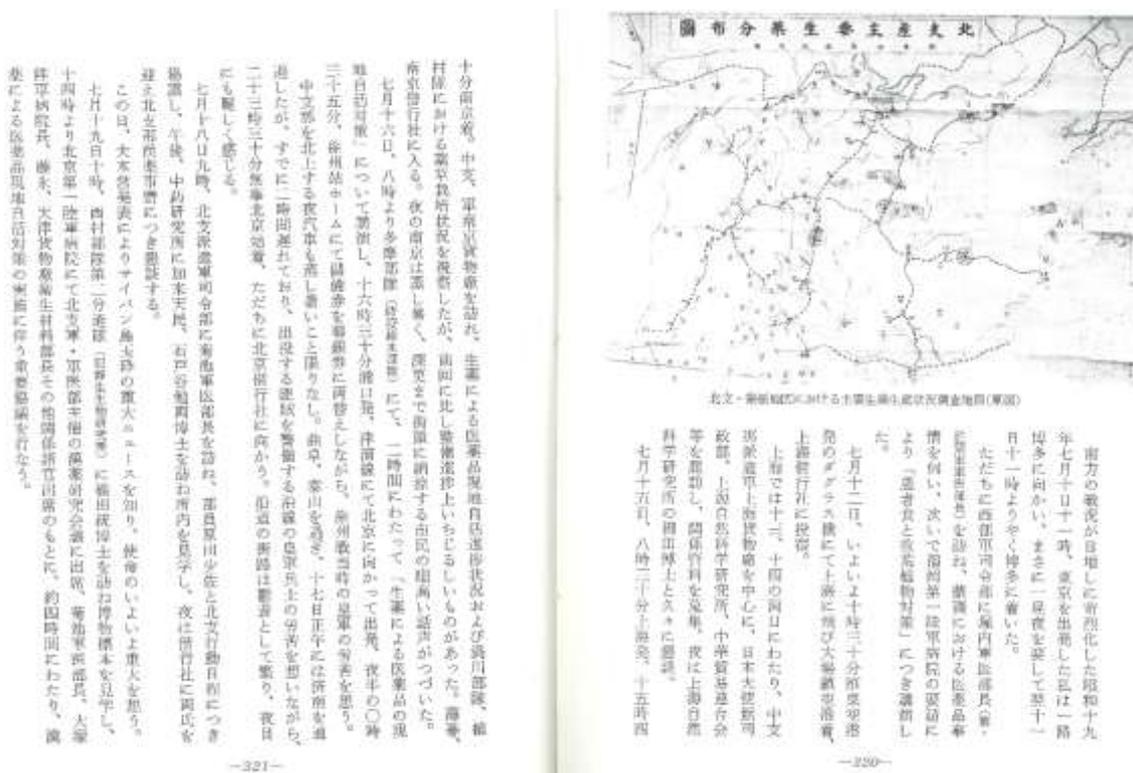
辰野高司は昭和 17 (1942) 年 10 月東京帝国大学医学部薬学科に入学し、海軍見習尉官候補生 (薬剤科) の軍歴を経て、昭和 20 (1945) 年 10 月菅澤重彦教授の薬品製造学教室の助手となった。

辰野は学生時代、有機化学一辺倒の当時の薬学に疑問を呈し、「あるべき薬学」「薬とは何か」について若い薬学者と共に研鑽を重ね、その指導的立場にあった。そして、薬学の歴史を知ることから始めるべきであるという命題の下に本書を執筆した。本書は薬の歴史、日本における近代薬学、日本の薬学教育、薬と社会との関係を詳述し、日本薬学の進路を探求している。

また、当時の医薬品の過剰生産による過当競争、乱売により「薬の本来の意味ーレーゾン・デートルーが歪められ、一番大切な「何か」が失われてしまった」ことも執筆の背景にあった。辰野は「序章 薬とは何か」で以下のとおり述べている。

「私はこの「何か」を探り出すために、薬の歴史を駆け足で一瞥し、その中から薬のもっている本質的な性格をひろいあげ、さらにわれわれ日本人のもつ薬感が他の国々の人びとと違った何かに歪められているかどうか、そのために薬の歴史とわが国の薬の研究の跡をたどるところから始めてみたいと思う。」

7. 『和漢薬の世界』 木村雄四郎 創元社 昭和50年



本書は漢方再認識の趨勢が高まり、和漢薬の急激な需要増を背景に木村雄四郎の多年に亘る研鑽をまとめて刊行された。

木村は京都薬学校を卒業し、東京帝国大学医学部介補に嘱託され、朝比奈泰彦の下で生薬学、植物化学を学んだ。朝比奈の推挙で東京衛生試験所技手に任官し、津村研究所に入り、薬用植物園で和漢薬用植物の試作、開発研究に尽力した。戦時中は興亜院、陸軍省などの委嘱を受け、中国各地、仏領インドシナ、タイ、マラヤ、ジャワ、スマトラ、朝鮮、台湾などで薬用植物、生薬市場の調査を行った。戦後は東京都立製薬研究所所長を務め、日本大学工学部薬学科教授に就任した。

木村は本書の自序で薬学を志したきっかけを以下のとおり述べている。  
 「私は少年の頃、父の仕事の関係から家族ぐるみ、地方でも珍しい漢方医の旧家をそのまま借家住まいしていたが、玄関の土間には往診に使われた籠が吊してあり、私の勉強部屋には大きな薬箆筒があって、抽斗には漢方薬の剉み薬が残っており、いつとはなしに漢方薬の匂いや味に言い知れぬ魅力を感じていた。長じて薬学を志望し、生薬学を専攻するにいたったのも、ひたすら少年の日の夢を追ったものである。」

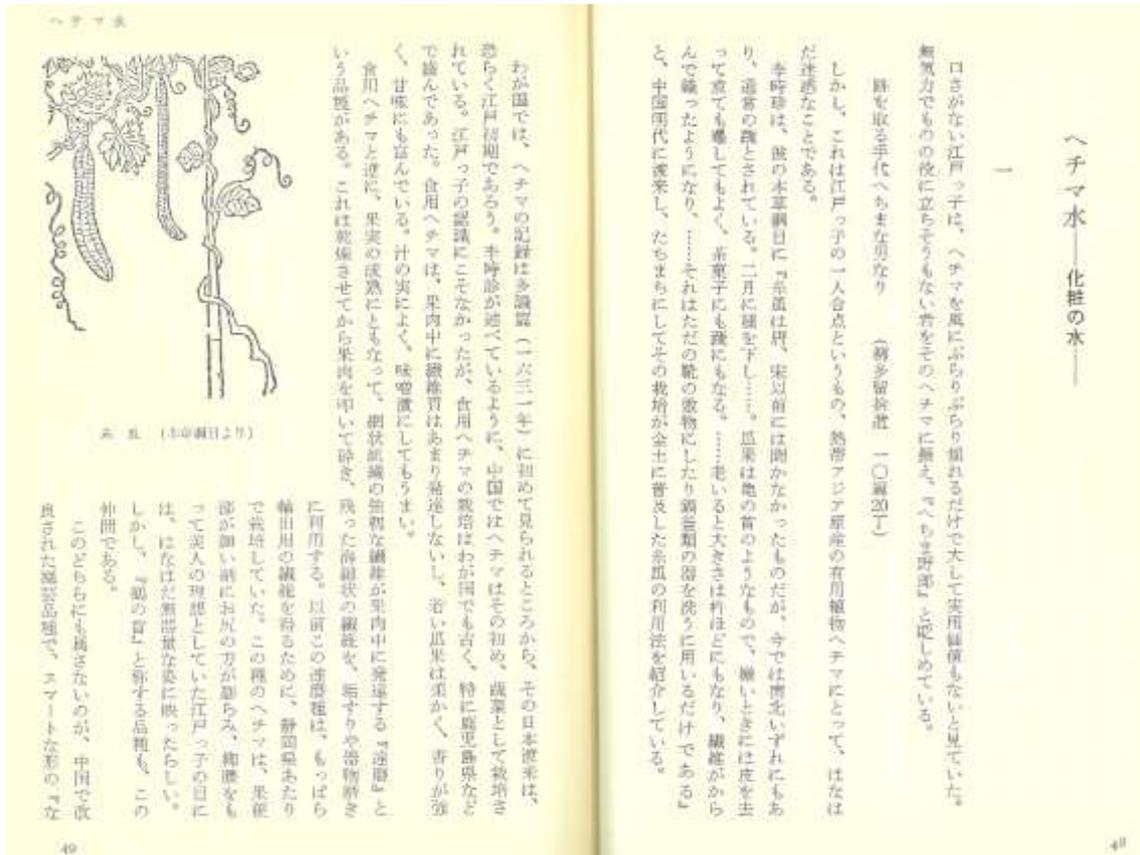
8. 『薬学の創成者たち：自伝対談』 伊沢凡人 出版科学総合研究所 昭和52年

16	大木卓	対談日 昭和二六年五月一日
15	日馬長三郎	対談日 昭和二五年一月一日
14	服部安蔵	対談日 昭和二四年八月一日
13	竹内甲子二	対談日 昭和二三年九月一日
12	篠田淳三	対談日 昭和二六年二月一日
11	岩垂亨	対談日 昭和二六年二月一日
10	栗原広三	対談日 昭和二七年三月一日
9	緒方章	対談日 昭和二三年一月一日
8	清水藤太郎	対談日 昭和二七年一月一日
7	柳沢保太郎	対談日 昭和二四年一月一日
6	鈴木衡平	対談日 昭和二四年一月一日
5	山科樵作	対談日 昭和二五年六月一日

伊沢凡人は東京帝国大学医学部薬学科の生薬学教室選科で朝比奈泰彦に学び、日本大学講師、東京都嘱託などを経て漢方処方相談所を主宰した。本書は以下の21名の薬学関係者と対談で薬業の第一線に活躍した人々が中心になっている。

明治・大正・昭和の薬学・薬業に関する膨大なエピソードが縦横無尽に語られ、近代日本薬学史研究のための貴重な証言となっている。「対談を終えて」で対談者の人となり鮮やかに描写されていることも本書の魅力である。

林四郎（第一薬品産業顧問）、上中啓三（三共顧問）、近藤平三郎（東京大学教授）、田中秀介（本郷薬局社長）、山科樵作（三共取締役）、鈴木衡平（グレラン製薬研究室長）、柳沢保太郎（グレラン製薬社長）、清水藤太郎（東邦大学教授）、緒方章（東京大学教授）、栗原広三（東京生薬協会常務理事）、岩垂亨（万有製薬社長）、篠田淳三（第一製薬社長）、竹内甲子二（東京都薬務課長）、服部安蔵（共立薬科大学学長）、日馬長三郎（武田薬工指導部長）、大木卓（大木製薬会長）、吉井千代田（薬事日報顧問）、岩永貞三（万有製薬常務）、高田ユリ（主婦連合会副会長）、山本有一（共立薬科大学教授）、辰野高司（東京理科大学教授）



三浦三郎は富山薬学専門学校を卒業後、昭和17(1942)年10月山之内製薬に入社した。昭和23(1948)年7月、横隔膜手術のため国立療養所清瀬病院に入院し、『本草綱目』を徹底的に読み込み、本草の研究を志した。和漢薬、薬用植物について独自の研究を行っていた。

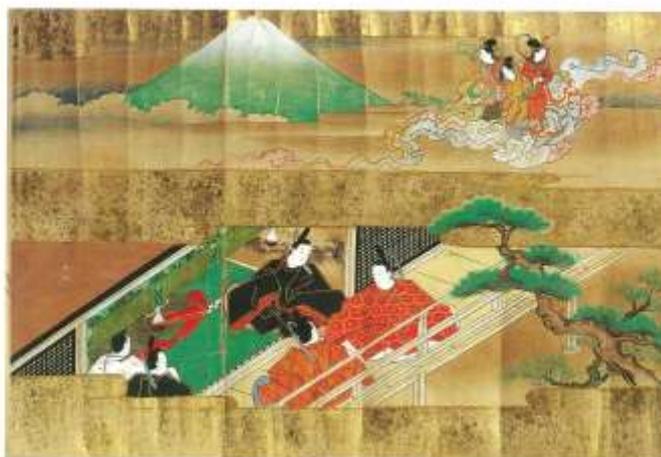
三浦は和漢薬、薬用植物について独自の研究を行い、多年に亘り日本薬史学会の行事企画薬史学雑誌の編集、集談会の推進役など意欲的な活動を行ない、学会の発展に多大の貢献を果たしたが、昭和52(1977)年6月13日、60歳で逝去した。

本書は三浦の没後、刊行された。古川柳に対する深い造詣に基づき、江戸庶民の生活で薬が果たした役割を考究した好著である。序文では川瀬清(東京薬科大学教授)は本書の価値について以下のとおり述べている。

「三浦先生はあくまで、社会的大変動時代としての現代に足をすえ、江戸庶民の生活の知恵を学ぶことによって、どのような現実問題の解決が可能であるか、という視点を貫いてこられた。川柳の解説という形式をとった本書であるが、いささかの懐古趣味も、物知り家風の一人よがりも感じられない理由は、先生の研究態度にあると思う。」

II-23 竹取物語絵巻

江戸初期写。「いにしえ物語」をテーマとした『竹取物語』は、わが国伝説物語の祖とされ、成立時期は延喜(901-923)以前説とそれ以後の両説があり、記録ではその検査もあつたらしいが、原本は今に伝わらない。上図は竹取翁が竹の中にかくや姫を発見し、家に持ち帰った場面。下図はかくや姫の昇天を描く。昇天後、翁夫妻は嘆きのあまり床に伏し、姫のいない世をはかなんで、不死薬の入った壺に毒薬をそえて其上を駿河で天に一番高い山に登らせ焼かせてしまった。以来、その山を不死(不死薬にちなむ)、不死(焼いた壺にちなむ)、富士(多くの民にちなむ)の山といわれるようになったという(東京・吉田幸一氏蔵)。



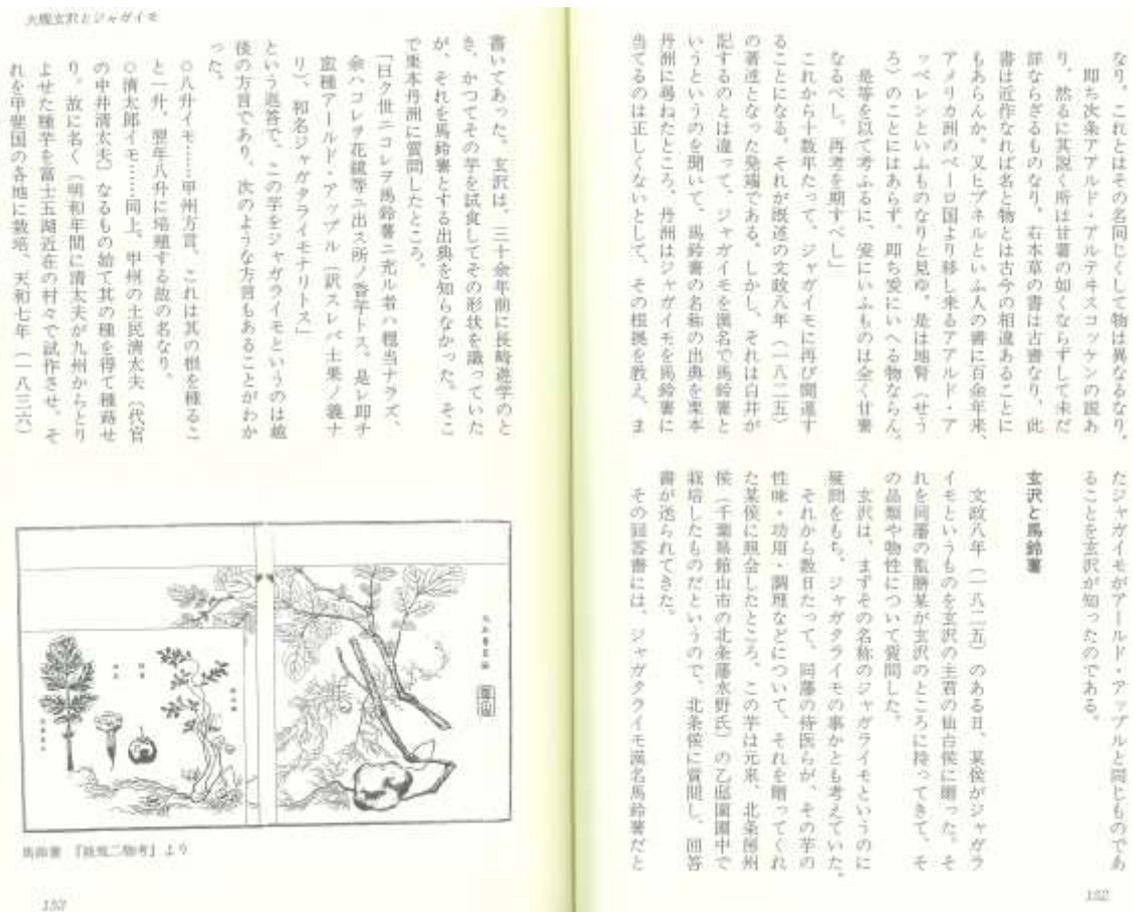
本書は宗田一が『ノイエ・インフォーマ』誌上に昭和54(1979)年1月から昭和61(1986)年8月までの8年間、96回に亘り連載したものに新史料を補足し、『図説・日本医療文化史』として刊行された。古代から近代までの医学・医療の発達と展開過程を広く文化史の中で捉え、図版を豊富に挿入し、貴重な医療文化財に触れることができる畢生の大作である。

宗田は昭和16(1941)年官立金沢医科大学薬学専門部を卒業後、武田薬品に入社したが、同年12月陸軍に入営し、千島列島松輪島に駐屯した。昭和22(1947)年復員し、昭和23(1948)年吉富製薬企画課に勤務し、学術部長、医薬品本部次長、調査役を歴任し、昭和56(1981)年退職した。

日本薬史学会、日本医史学会、洋学研究会の重鎮として『薬史学雑誌』『日本医史学雑誌』『医学史研究』『医薬ジャーナル』などに健筆を振るい、数々の著作を刊行した。

京都にある自宅の書斎、廊下は膨大な史料、書籍で溢れ、愛飲家で紫煙を燻らす陶酔の一刻を楽しみ、研究の方法論、論理構成を諄々と説き、書道と絵画に堪能であった。史料に基づき、事実を積み重ねて緻密に考証する学風は他の追随を許さなかった。

1 1. 『渡来薬の文化誌：オランダ船が運んだ洋薬』 宗田一 八坂書房 平成5年



宗田一は旺盛な執筆活動を展開し、『江戸時代の科学器械』（藪内清共編、昭和39年）、『日本製薬技術史の研究』（昭和40年）、『近代薬物発達史』（昭和49年）、『日本の名薬：売薬の文化誌』（昭和56年）、『健康と病の民俗誌：医と心のルーツ』（昭和59年）、『図説・日本医療文化史』（昭和63年）、『渡来薬の文化誌：オランダ船が運んだ洋薬』（平成5年）などを刊行した。

本書は宗田一が10数年に亘り『医薬ジャーナル』誌に連載した論稿の中、近世日本に輸入された洋薬に関するものをまとめて刊行された。洋薬とは南蛮（スペイン・ポルトガル）貿易による南蛮船、江戸時代の鎖国下で紅毛（オランダ）船によって舶載された薬種のことである。

16世紀から19世紀の渡来薬の伝来の時期、効用、薬草の形態、流通経路、社会的な反応など近世日本の社会史、文化史が達意の筆致で綴られ、書簡、触書などの一次史料を駆使した記述は臨場感に溢れている。「資料紹介と解説」では稀覯本である宇田川玄髓『遠西名物考』が紹介され、巻末には享和3（1803）年に著された中島真兵衛『舶来諸産解説七拾條』が掲載されている。

12. 『対談でつづる昭和の薬学の歩み』 辰野高司 東京理科大学薬学部同窓有志会  
平成6年



菅野勲村（昭和25年刊）『戸の教授のほし』一巻  
昭和薬科大学・古澤副校長にて 益岡心 伊藤凡人民 桂中央 辰野高司氏



東京理科大学薬学部同窓会（1963年5月15日）  
右から石館勲郎、高木敬次郎、柴田承二、高木敬次郎



東京理科大学昭和15年卒業生同窓会（昭和15年5月）

本書は石館守三、菅澤重彦、津田恭介、柴田承二、山田俊一、水野傳一、富田真雄、矢島浩明、浜名政和、池原森男、永田亘、亀谷哲治、岡本敏彦、久保早苗、高木敬次郎、田村善蔵など昭和の日本薬学を牽引した薬学者と辰野高司の対談集で昭和の薬学史の貴重な記録である。

本書の成立は辰野の卓越した識見と豊富な経験、幅広い交友範囲、優れた文筆力、そして円滑な人柄のしからしむるところである。語られた内容を生み出す当時の時代背景が描き出され、昭和の薬学史を眼前に彷彿とさせる良書である。

高木敬次郎（日本薬剤師会会長）は推薦文で本書の価値を以下のとおり述べている。

「公式記録の裏には数々の隠された苦心があり、また失敗もある。これらの障害をのり超えて薬学を時代の要請に沿って発展させるには先見性を持った優秀な頭脳と実行力が必須である。辰野博士が選対談された方々はまさに激動の昭和の薬学の変革を推進された人達である。裏話は興味の対象になるが、単にそれに止まるものではなく、後世の人の指針になる。世界戦争を伴った激動の昭和のはなしは平和裡に進行しつつある大変革の時代の薬学関係者にも必読の書となろう。」









東京大学薬学図書館展示 図録

薬史学文庫の設置とその意義 -日本薬史学会創立 70 周年を記念して-

2025 年 1 月 24 日

東京大学薬学図書館

東京都文京区本郷 7-3-1

03-5841-4705 tosho@mol.f.u-tokyo.ac.jp